

猫は家になつくので人になつくのではない、という説がある。昨家庭先に新居を建てた経験からいうと、家になつく猫の方が少ないように思う。家が出来る前から出入りして、人間が引越すときにはもう住みついている猫もいるが、古い家屋が解体されても、なお野宿して頑張る猫もいた。その猫はお産の数時間前になってやっと新居に居つくようになった。

猫がお産をするときは、とくに初めてのときは非常に不安なものであるらしい。誰でもいゝから函の中に仲間を呼び込みたがる。そういうときに“人のいゝ猫”がよくつきあってあげるようだ。上手に育てる猫と、まるで生み放して遊びまわるのがいる。

猫は自分の生んだ仔を喰べるといふのが本当でしょうかという質問には、野性の残っている猫はそういう場合があると申し上げる。身体が弱いとか、病気で育つ見込みがないと思うとお乳を飲ませないようだ。

猫仲間の仁義というか、居心地のいゝ場所に先客がいたら、猫は人間にはききとれない猫語で挨拶しながら、先客の身体をなめまわす。それをしないと一喝されてしまう習性があるらしい。

喰物にも嗜好があつて、生魚をみるとじん麻疹をおこすのか、やたら身体をなめまわして喰べようとしない猫がいる。海苔、とうもろこし、ほうれん草など妙なものに夢中になる猫もいる。

猫の観察記録を書きだせばきりがなからもうやめます。何故地理学と関係のない猫の話のかくのかと抗議する方があつたら、馬鹿だと思つてあきらめて頂く他ない。猫の世界に人間社会の原点を探っているなどとは申しません。

リオ・デ・ジャネイロの季節

西 沢 利 栄

1977年11月、5年振りにブラジルを訪れ、翌年の9月までの10ヶ月間、リオ・デ・ジャネイロに滞在して、住み慣れた東京の顕著な季節変化とは異つたゆるやかな季節の移り変わりを体験することが出来た。

1971年と1973年の2回、ブラジルを訪れ、リオでホテル住まいの2～3週間を過ごした事もある。しかし、この2回の訪伯は、いづれも3ヶ月足らずの短い期間であり、そのうえ調査のために各地を移動した事もあるが、ヴィヴィッドな季節の移り変わりを知ることも、また味わうという事もなかった。

そんな訳で、機会をみてブラジルのどこかに住みつき、一年を通じての季節現象を見てみたいと考えていた。幸いにも今回、その願いが叶えられて、一年間ではなかったが、一年の大半を一ヶ所に住み、カリオカに混じって生活することが出来た。

リオに住み始めた頃、私は友達によく「リオの季節の移り変わりは？」という質問をした。そんなとき「ないね」とか「5月頃になると快適な気候になるよ」とかいう答えが多かった。また、リオ在住の日系人に尋ねても「一年中景色は変らないしね」という様なことであつた。そして、私自身も12月から2月頃までの最初の3ヶ月程は、さっぱり変わりばえのしない木々の緑や道ゆく人々の服装な

どに辟易もし、3ヶ月もあれば、はっきりと変わって行く東京の季節をなつかしく思ったりもした。

ところが、そんな私は、2月末頃から蟬の声が聞かれなくなり、はたるが姿を見せなくなったのに気がつき、季節の移り変わるのを見た思いで、心の休まるのを覚えた。そういえば、1月の猛暑も2月上旬のカーニバルを過ぎた頃からは、いくぶん和らぎ始めた様にも思われた。

また、5月頃になると、夏物に取って代ってウィンドーにはセーターなどの、いわゆる冬物が飾られ始めたりもした。そして、5月に入ると、さわやかな日が多くなり、陽の当たらない部屋の中ではセーターなどをはおったりする事が多くなった。また、道ゆく女性の中にはブーツをはいた者も現われ始めた。

しかし、季節の移り変わりの圧巻は、何んといってもアmendエイラの紅葉である。リオの海岸ぞいの街路樹に多い。このアmendエイラは、6月の初め頃から色づき始め、7月上・中旬には真赤になって葉を落とす。この他にも、いく分は紅葉する木々もあるが、アmendエイラの紅葉は見事で、その紅葉越しに見るリオの高層建築物群の眺めは、誠に素晴らしいものであった。ところが、このアmendエイラの紅葉の時期は、またアmendエイラの新緑の時期でもある。隣り同志の木が一方は紅葉しているのに、他方は新緑であったりする。

リオでは、冬の季節がなく、秋と春が同居する季節が現われるのである。

私の $\frac{1}{4}$ 世紀

伊 部 久 子

◇はじめに

1954年の卒業式で、蠟山学長は「諸君は、今まで概念の世界で生きてこられたが、これからは実践の社会にふみこむのである。」といわれました。

今年は1979年、あれから、なんと25年、 $\frac{1}{4}$ 世紀がすぎているのです。こし方、ふりかえってみると、その生き様に悔いること多く、こうして記すこともためらいます。

◇昭和29年

当時は朝鮮動乱があったとはいえ景気の恩恵はまだ庶民に行きわたらず、私ども第二期生、7名中6名が公立の新制中学教員として就職しました。(あとの1名は国土地理院。)私は、江東区立中学。堀り割りに丸太が浮かび、やけただれ、さびついたトタンに囲まれた住居、林立する煙突が黒煙をはき出している街でした。校舎は、コンクリートがむき出し、教室のいくつかは、引揚者の住宅にあてられ、それが立ちのかされたまゝになっていました。お茶の水女大学の地理学教室とは雲泥のちがいです。1954年は、インドシナ戦争が終結し、米ソに対抗してネール、周恩来が華々しく登場して、平和五原則が確認された年です。生徒と私の年齢差は10才。戦災、敗戦の共通体験があるせいか中学生のわりには、平和の問題や婦人問題を共通に話し合った記憶があります。

◇昭和30年

先生の仕事と生徒たち。何もかもすばらしいことと受けとめました。勤務は暗くなるまで、朝は待